

【広島のエスニシティ】

マイノリティー（在日韓国人一世）の 福祉の現場で

安 錦珠

まず、私が働いているデイサービスセンターの一つの光景を紹介しよう。センターの利用者がみんなでCDを聞き、歌本を見ながら歌を歌っている。年齢は60歳代から90歳代の年齢の人たちである。90歳代の人が上手に歌っているのに、70歳代の人が、歌本をもって中に入るが、歌えなくてぼかんとしている。職員が隣りに付き添って、歌詞を読む。すると、ようやく歌い始める。歌ができた時代に多くの人に歌われた曲ならば、歌詞を教えて貰えば、少しは口ずさむことができる。しかし、歌える曲の数は少ない。こうした人がいるので、歌を歌うというプログラムは、申しわけない気もする。しかし歌うことは、リハビリにもなるし、元気づけにもなる。利用者に歌が好きな人がおれば、歌を入れるのもいい。結局、強制でもないのに、その場から離れる人はひとりもいない。

90歳代の人が字を読んで歌ったりする一方で、70歳代の人が、字を読めなかったり、歌を歌った経験がなく、歌えなかったりする。在日一世のハルモニ（おばあちゃん）の中にそういった人たちがいる⁽¹⁾。中には、日本の小学校に通って、字が読める人もいる。しかし大方の人は、学校に行ったことがなく、字が読めない。また生活に追われて、歌を聞いたり、歌ったりする余裕さえなく、生きてきた。そんなとき、あるハルモニが、決まり文句のようにいつも、「ウチの人（夫）は歌が好きやった。いつもレコードを買っては聞いていた。これも聞いたことがある。」と言う。歌詞を隣りで教えると、自信なさげに口をぼそぼそと動かす。彼女は、字（ひらがなとカタカナ）は少し読めるが、それでも、フリガナが付いてないとまったく読めない。読むにも時間がかかって、歌についていけない。隣りに付き添って読む人がいなくなると、口の動きを止めてしまう。日本の歌が分からないからといって、韓国の歌が分かるのでもない。

ハルモニには、幼い頃に親に連れられて日本に来た人や、10歳代で結婚して来た人が多い。デイサービスセンターの在日の利用者は、今は男性はおらず、女性ばかりになった。在日の男性には、体に無理を重ねたためか、早死にした人が多い。ハルモニは、来日する前は、女だからと学校も行かず、村で家の家事や仕事をしていた。それで、時代の流行歌を歌う機会もなく、周りの人が歌っていたのを聞くくらいであった。来日してすぐ

子を産んだり、夫に早死にされた人は、一家の生計を担ってきた。また夫がいても、在日一世の男性には、酒に溺れる人が多かった。ハルモニたちは、「昔の韓国の男って、つまらん人が多かった」と、口癖のように言う。男たちは、日本社会で厳しい差別を受けて、その不満の矢を妻に向けていった。ハルモニは、そうした夫をもち、一家の生計を担って、子どもを育ててきた。趣味をもつ余裕など、とてもなかっただろう。

つぎに、デイサービスセンターの紹介をしよう。

4年前、私に、私も「在日一世」だと目覚める機会が訪れた。私は、2000年7月から、広島市西区の広島キリスト教社会館の「デイサービスセンターかりん」(以下かりん)で働いている。同年4月から介護保険制度が施行され、デイサービスセンターが各所に設立されるなか、社会館が行政の援助を受けて行なっていた事業が、介護保険制度の下のデイサービスセンターに再編された。「デイサービスセンターかりん」は、他のセンターと異なる性格をもっている。このセンターは被差別部落の中に位置して、地域のニーズに合わせた事業を目標としてきた社会館の理念の元で、地域の高齢者の安らぎの場所となった。センターを利用する人には地域の人が多く、在日韓国人も多く含まれている⁽²⁾。曜日によっては、在日の利用者が過半数を占めることもある。月曜日から土曜日の6日間で、1日20人から25人の高齢者の利用者がいる。なかでも水曜日と金曜日は、在日の利用者がとくに多く、水曜日は25人のうち15人が、朝鮮半島と関わりのある人たちになる(在日一世と、その家族関係にある日本人)。これほどマイノリティーの利用者が多い施設は、あまりないのではなからうか。

かりんの開設に関わった職員によれば、社会館近くの公園で、よく、在日のハルモニたちがおしゃべりをしていて、彼女たちに社会館の一室を提供し、お茶をサービスしたのが最初だったという。社会館の周辺には、在日一世の居住者が多い。二世や三世では他地域へ引越す人が多いが、一世は同じ地域に留まる傾向にある。こうして、お茶の間として始まったデイサービスは、その後、在日と日本人の混合利用のデイサービスセンターとなった。今では人が人を呼び、他地域の在日のハルモニにも、かりんに來たいという人が増えている。そこには、職員の、在日の人たちへの思い遣りが深く、そのため在日の人たちに居心地がいい、という事情もあるだろう。職員には、韓国語の読み書きができる人もおり、朝の会では(下手ながら)韓国語での挨拶をしたりする。それに聞いて、ハルモニたちは笑いながら、職員に韓国語の指導をする。笑いを取るため、下ネタが飛んだりもする。ハルモニたちが教える言葉は、韓国語でも、ふるさとの慶尚南道の方言である。「ハルモニ」は「ハルメ」と発音される。「ヨギ オセヨ(こっちにいらっしゃい)は、「ヨオソ」と短縮されて、覚えやすい。また、方言にはリズムがあり、若い職員が面白がってハルモニたちと話すときは、方言がよく使われる。ハルモニたちも調子に乗って、職員が日本人である

ことを忘れるのか、日本語で話していて、突然韓国語になったりする。それでも職員は、前後の話で雰囲気をつかんで、「フンフン」とうなずく。両方の言葉を知っている私には、とても滑稽な光景となる。なかには、日本語で話すハルモニのとなりに几帳面なハルモニがいたりして、「あんた、日本語で話さんと分かんよ」と釘をさしたりする。すると、言われた方は、それに気づいて「オオ」と言って、日本語に戻る。このような光景が、日々見られる。しかし、だれもそれを気にしない。

ハルモニの楽しみが、もう一つある。それは、一番の楽しみかも知れない。ふるさとを離れて来日した人たちの生活を観察すると、衣・食・住のなかで、食がもっとも強く習慣のなかに残っている。それは、韓国食が個性的であることに原因があるのだろう。韓国人は毎食キムチを食べないと気がすまない。私の姉は、外で洋食を食べたときなど、帰るとすぐ冷蔵庫を開けて、キムチにかぶりついていた。それほど韓国食は個性が強く、食の習慣が変わりにくい。かりんでは、そのことを配慮していつも韓国料理を出す。在日歴70年前後というハルモニたちは、在日歴16年の私ほどは韓国食に執着しない。それでも、ビビンバやトック、チャプチェ、キムチチゲ（キムチ鍋）などが献立に上がると、とても喜んでいる。そして、「この人は料理が上手い。韓国人のように作っている」と、調理する人への誉め言葉も忘れない。料理が上手いのは、みんなに喜んでもらいたいという調理する人の心と、当の利用者がおいしい調理法を教えたからである。浅い日歴の私と違って、日本での長い生活のなかで、ハルモニたちは、独特の韓国料理を身につけたと思える料理が、たくさんある。とくにチヂミがそうである。韓国ではまずないことであるが、チヂミのなかに味噌を入れたり、日本のだしを入れたりする。また、慶尚南道出身の人が多いせいか、トックのだしを鳥で取る。私が育ったソウル近辺で見たことがない調理法が多い。ハルモニたちは、こっちこそ韓国風だと言う。在日して70年になれば、記憶が薄れることもあろう。食べ物の話になると、止まらない。かりんでは、私も、料理への執着は半端ではないようである。普段優しい同僚からさえ「うるさい」と言われたりする。この「うるさい」に付き合ってくれたからでもなかろうが、今では、毎日のようにキムチが昼食のテーブルに上がるようになった。日本人の利用者もけっこう喜んでいる。キムチが苦手の人（辛いのが嫌いな人や、身体の都合で辛いものがだめな人も）や、キムチを食べない人（日本食以外に受けつけない人）も、食事にキムチを出すことに文句を言わない。うれしいことである。

社会館では年1回のバザーを催す。保育園、小学1年生から中学生までのグループ活動があり、また、デイサービスセンターかりんと訪問介護事業所（ホームヘルパー）かりんの人たちが、いっしょにバザーを盛り上げる。会場入口の横に、かりんの韓国コーナーが設けられる。ハルモニたちが、張り切ってキムチをつける。白菜のキムチやカクデギ（大根のキムチ）

がおいしいと、評判である。チヂミをどんどん焼く。日本人も、キムチ作りを手伝ったり、ピリッと辛いチヂミをほおぼったりする。

かりんでは、韓国人と日本人がたがいに、国ではなく、ふるさとを語り合うような雰囲気になる。だれもが自分のふるさとを自然に表わしている。かりんだけをみると、異なる民族が共生する社会が、実現したような気持ちになる。

その後、総連系の事務所に「サムケア・アリラン」という在日のデイサービスができた。そこは、もちろん職員と利用者の全員が在日の人たちで、センターでは朝鮮語が話されているそうである。サムケア・アリランが開設される時、職員たちは、京都にある総連系のデイサービスセンターで研修を受け、また、社会館のかりんにも研修を受けに来た。そして、2003年4月に開設となった。開設当初は、かりんの利用者のなかに、「あれは北だ」という話も出たが、今では、かりんとサムケア・アリランを掛け持ちで利用する人も増えた。かりんでも、サムケア・アリランの話が自然に出るようになった。歳をとると、北も南もないのだろう。韓国から来た私には、よく分からないこともあるが、在日一世の人たちに心休まる場所がもう一つできたことは、ほんとうに嬉しい。

かりんで働いていて、悲しいこともある。在宅をよぎなくされ、家から特別養護老人ホームに入った元利用者が何人かいる。その一人に、バザーで熱心にキムチを作ったPさんがいる。Pさんは、韓国語が分からない家族にもいつも韓国語で話しかけるといふ人である。社会館のバザーの後、かりんの職員がPさんのことを思い出し、施設も近いということで、バザーのキムチを持って、Pさんがいる特別養護老人ホームを訪ねたことがある。Pさんにキムチを差し出すと、Pさんは、「ここはキムチを食べると匂いがするから食べられない」と言って断られた。Pさんは、その後認知症が進行し、今では本当に韓国語しか話せなくなった。その特別養護老人ホームでは、もう一人の在日一世に通訳を頼んでいるという。しかし、すべてを通訳するのは大変なことである。Pさんはそのキャラクターで施設の職員達に好かれているが、彼女の言葉は独り言になって施設内をさまよっているだろう。

私が訪ねたとき、Pさんは私のことは忘れていた。かりんの古いリーダー2人が写っている写真を取り出し、その写真を見せて、「あんた、この人か」と、韓国語で聞いてきた。「そうですよ」と韓国語で答えると、Pさんは、うれしい顔になり、自分の服をあげると言って、パジャマを差し出した。そして、韓国語で延々と自分の生活史を語り始めた。土木現場や失対（失業対策の仕事）で懸命に稼いで家を建てたのに、火事で焼けてしまったこと、原爆のときは3人目の子を抱えて比治山に逃げたことなどなど。話が途切れるたびに、「死んだ方がまし」と繰り返す。そして一息

については、同じ話を繰り返す。私は、Pさんのことを思い出して、私の子に意地悪を言ったりする。「ママがおかしくなったら、韓国の施設に入れてよ。日本の施設には入らんけんね。ママは歳をとってもキムチが食べたいからね」。そんなとき、子をからかうつもりだけなのに、幽霊にでもなった心持ちになる。

かりんに、「クレヨンで絵を描こう」というプログラムがある。あるとき、私がプログラムを担当した。それまでは、絵の輪郭が描いてあって、その上に色を塗りつぶす「塗り絵」が主であった。私はそれを変えて、利用者たちに、白い画用紙に自分で絵を描くように言った。戸惑ってもいけないと思って、テーマを与えることにした。山や湖や太陽や家や木を挙げて、簡単な絵を描いてほしいと言った。日本人の利用者のなかには、尖った山を描く人、丸い山を描く人、二重三重の山と素敵な景色を描く人がいた⁽³⁾。ところが、在日のハルモニたちは、どう描けばいいのか分からない。迷い迷って、手にもったクレヨンが画用紙に下りない。やっとのことで描いても、線に自信がない。絵も形になっていない。山やイメージが湧かないようである。そうではなく、山は知っているが、「山」なるとどうにも描けない。ハルモニたちは、学校で物を描く力をつけるという経験なかったのだろう。教育の専門家ではないから難しいことは言えないが、学校教育というものの力の大きさに、深く考えさせられた。

もし私が日本人で、このようなプログラムの進め方をしていたなら、「在日のことをもっと考えてほしい」とか「在日の人への配慮がない」などと、厳しく批判されていたかもしれない。しかし、私が韓国人であること、私のやり方では具合が悪いことがあらためて発見されたことで、批判は免れた。指先のリハビリだけでなく、頭のリハビリのためにも、次からは初級編から始めようということになった。

2004年9月、府中町で在日のハルモニに字を教えている識字学校「トンベックの会」と交流をもった。トンベックの会を応援している在日保護者会のメンバーが韓国料理を作り、トベック会のハルモニたちがかりんに遊びに来られた。昼には、チャンゴの先生も来られ、チャンゴ演奏をし、会場は韓国の踊りで湧き上がった。この日の冒頭に、かりんのセンター長が、「今日は韓国への日帰り旅行をします」と話され、一日まるごと「韓国の日」になった。日本人の利用者も大喜びであった。私は、この日のことを「社会館だより」第104号（2004年12月）で、次のように書いた。

かりんは、トンベックの会と違って、地域性の強いデイサービスである。ここには、日本人の利用者と在日コリアン利用者が混じりあっている。そして協力しあい、いたわりあっている。8月の「韓国の日」に料理を作ったときは、日本人の利用者も、いっしょに楽しんでくれた。まさに、小さ

な地球がかりんにあった。

近年、共生という言葉が出回っている。かりんでは「共生」の本当の意味を学ぶことができる。またかりんから、世界に向けて本当の「共生」が発信できるのだと私は思う。

激動の時代を生きてきた在日一世が、いま年老いている。年老いると、昔のふるさとがひときわ懐かしい。私が将来年老いる姿が、在日一世の姿に重なる。身体が元気なうちは何とかなる。しかし、人の世話を受けないといけない身になると、ふるさとが切なく、懐かしさが込み上げてくるだろう。ホルモンたちは、日本での長い生活のなかで、ふるさとへの思いを抑える術を身につけてきた。一世が愛する二世たちは、親への思いはあるが、親のふるさとに対する郷愁を知りつくすことができない。

私は16年前に来日したが、今の在日一世のようにふるさとを離れて年老いることになるかどうかは、分からない。もしそうなれば、私も寂しい思いをすることになるだろう。そうした不安が、心をよぎる。いまや、世界まるごと国際社会になった。また高齢社会にもなった。しかし、高齢者福祉の面で、日本社会は、まだ日本人の福祉にしかなっていないのではなかろうか。それは、在日一世の問題に止まらない。在日二世、私のような新来在日韓国人、または諸国からの新来在日外国人が、これから日本で年老いて行くことになるのだろう。マイノリティーの福祉は、今のうちに土台を作らなければならない。そんな焦りが、募るばかりである。

【注】

- 1) この施設は、被差別部落の中にある。部落の人にも学校に行けなかった人がいる。
- 2) この地域の在日韓国人の人口は広島で最も多いといわれる。在日が仕事を求めて集まってくる被差別部落は、大阪などにも見られる。
- 3) 利用者の中には認知症の方もおられる。認知症には程度の差があるが、重度の場合は絵を描くことができなかつたり、描いても形になっていなかったりする。ここでは、重度の認知症の方の話は、省かせていただく。

(あん くんじゅ：都市社会学研究所)